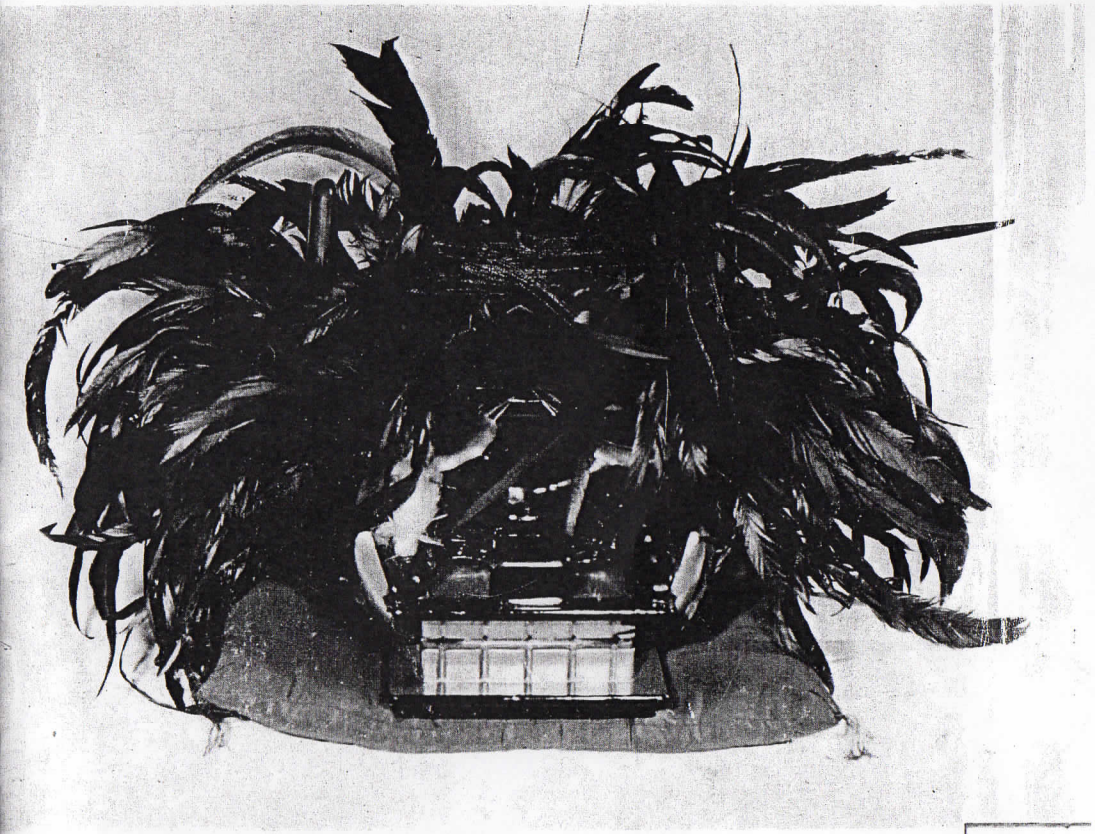
史誌



2

1974. 12

大田区史編纂委員会編

大田区の遺跡（2）

海をみつめる弥生のムラ

―大森望翠楼ホテル跡―

関　俊彦

大森の高台からきれいな海をながめることができたのは、いつごろまでであったのか、もうそれは遠い昔のような気がする。いまの街並からは想像もできない。なにしろ昭和四十九年十月一日現在、大田区の世帯数は二七二六八八、人口は六九二〇六六人という膨大な数字が、それをものがたっている。

ここに紹介する遺跡は、はげしい都市化の波に邁遇し消えていったものの一つである。国電『大森駅』のあたりから（山王側）、池上通りに沿って小高い丘陵が春日橋の近くまで続き、そこでポツンと切れている。かつて、この下まで東京湾の入江がのびていたらしい。現在は環状七号線が海へ向っている。南北に走るこの細長い丘陵には、狭く短い谷戸が数本入り、その最深部に水の湧きでる場所が何か所かあり、細いせせらぎは海浜にすいこまれるように流れていた。これらの谷は長い長い自然の流れが家や道をつくり、湧水を涸してしまった。

こうした丘陵や谷は現代人の餌食となって、もはや回復することができない。まして古代人が生活をしていた所だと知る人はいないだろう。しかし、かれらは生きていたというわずかな証しをのこしていってくれた。それは日常使っていた容器や道具のひとかけらであったり、あるいは火を焚いたり、寝起きした竪穴の一部、または貝塚などである。これらは、かれらの生活のほんの一部であるが、その一つ一つに人びとのぬくもりがかすかにのこっている。そのかすかなぬくもりが消え去ったかれらの生活をひもとこうとする私たちの心をたかめていく。

大正から昭和にかけて、大森の象徴ともいうべきホテルが八景坂の背にそびえていたことを記憶している方も少なくないだろう。そのホテル『望翠楼』は八景坂から手入れのゆきとどいた坂を登りつめ高台に建っていた。ここからの眺めは素晴しく、太陽はたえず青い海をキラキラさせていたし、海面をわたってくる風は急な坂道を息をきらして登ってくる人たちにとって、なんともいえない爽やかさをあたえてくれたのである。丘の上のしょうしゃなホテルは多くの文士や外人がよくやってきては夕暮までだべっていった。

夜のとばりが降り、天井のあかりが七色に輝きはじめると着飾った女性を連れだって男たちがやってくる。ワルツのリズムにのっていく組のカップが愛のステップに陶酔した。大きなガラス窓の外には街の灯が光り、遠くには漁火が一つまた一つゆれるのが見える。華やかな宴や芸術論をくりひろげた社交場も時の流れに勝てず、数数のドラマをのこして昭和七年幕をとじた。

旧新井宿二丁目一四九五番地（現在は山王三丁目三〇～三五）にあった『望翠楼ホテル』跡で桑山竜進氏が竪穴住居の断面を発見したのは昭和七年十二月十一日のことである。土地分譲にともなって

整備されたあとからローム層に掘られた住居の断面が十個、それからV字状の溝断面や炉址・焼土などと土器片も確認された。このほかに厚さ十センチほどの貝層が、深さ一メートルのU字状のピットのなかにみられた。

遺物は、弥生時代後期と古墳時代前期の土器が住居や貝層から、その他に土製の管状錘、紡錘車も発見された。貝層には鹹水産のカキ・オキシジミ・ハマグリ・オオノガイ・サルボウ・シオフキ・アカニシ・ウミニナ、淡水産のシジミ・マルタニシなどが出土した。

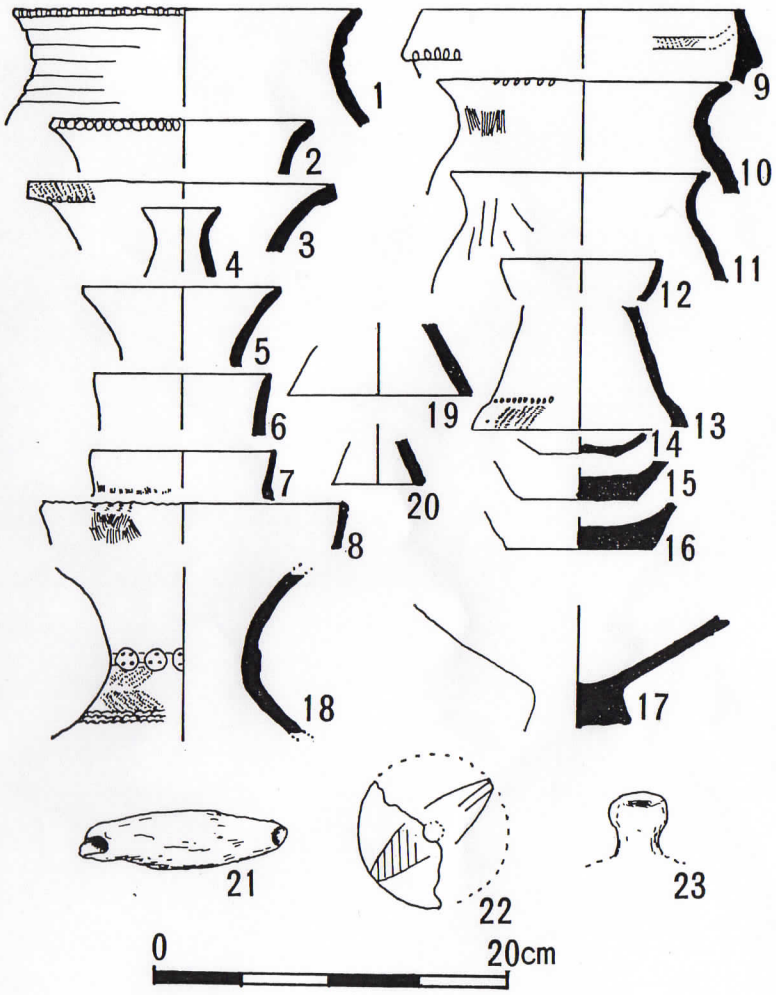
つぎに、これらの遺構、遺物からもうすこしかれらのムラを復原してみよう。二世紀の中葉、稲作の技術をもった人びとのグループが、海岸に面した丘陵にたどりついた。そこには狭い谷戸がいくつかあり、各谷戸には湧き水を出す地点が何か所かあった。谷戸の湿地は深い草でおおわれ、水は少し鉄分を含んでいるが塩分はなく、水田を営むにはもうしぶんなかった。住居は細長い台地の東側に建てられ、大きく高い木と若干の灌木をのこして切りはらわれた。するといままでのうっとうしさにかわって風通しがよくなり、眼下に海がひらけた。そして水田が可能な谷はすべて開墾し、籾が蒔れ、たえず稲の成長を見守ったのである。また、女・子供は遠浅の海に出ては魚や貝をとった。ムラびとたちがもっとも好んだ貝はハマグリ・カキ・サルボウである。

土器は秋から冬にかけて女性たちの手によってつくられたらしい。容器としての土器は煮沸用・貯蔵用と盛るものの三種がつくられた。煮沸には1・2などの台付甕が、貯蔵には3・18などの壺が用いられ、1・2は口縁部に押捺文がほどこされている。3・18には羽状縄文が、18の頸部にはこの期の特徴であるボタン状の小円盤をはりつけ装飾している。壺には器面をヘラ状工具で磨いただけで文様を施文しないものもある。そしていくつかの土器は表面を酸化鉄で赤く塗っている。

桑山氏が採集したもののなかには土師器があったと報告されているが、土器の実測図をみるかぎり、それに該当するものはなく、私は弥生時代終末期のものが含まれているようにみた。

このほかに糸を紡ぐための紡錘車が発見されていることから米づくりのあいまに機織がおこなわれていたようだ。管状土錘が一点出土しているが、これは網のオモリとしてたくさんつけられたもので、海浜のムラのようすが浮んでくる。

ムラも数年経つと米づくりが安定し、ムラびともふえ、新らたに水田をつくらねばならなくなり、分村がせまられた。まず水田の拡張には、環七通りから東に入った『弁天池』のある谷戸に鍬がおろされた。この谷戸はここいらでもっとも大きく水量も豊富で、ムラにも近く適したところである。ムラの変化は、若者たちによってはじまった。新しい家庭をもつとなると、いまのムラでは少し狭すぎるし、それかといってわずかな人数では水田を営むこともできない。必然的に本村の近くにムラをつくるほかなく、数戸の家がその運命をたどった。本村を離れた人びとが選んだ地は、現在熊野神社がある丘陵の先端部である。ここは本村まで数百メートルで、本村の人びとと一緒に水田を耕作したり、海へ出て漁をすることができる。ここも狭いながら人間が暮すにはすべての条件がととのっていた。



1～18　土器　21　管状土錘　22　土製紡錘車
23　把手　(21～23　スケール1/2)

大森望翠楼ホテル址出土の土器　関付図（『先史考古学』1―1より）

昭和三六年米内邦雄氏が、このあたりを踏査した際、熊野神社（旧新井宿三丁目一四〇七、新山王三丁目四三）の社殿裏の断面にローム層を掘りくぼめた住居址が一基と、炉と土器片を確認された。土器は胴部に羽状縄文を施文し、沈線で区劃した「久ケ原式」である。私も四八年社殿横に駐車場をつくるため崖を崩した部分に、炉をともなう竪穴住居址の落ちこみを一基観察している。土器は「久ケ原式」である。いままでに二基の竪穴住居が確認され、ともに「久ケ原式」期であることからして望翠楼ホテル跡から発見されたムラと関連づけてみた。社殿裏にはごくわずかであるが遺跡がのこっているので、一日も早く手をうって保存するなり調査することが大切である。

かれらが長い間住みなれたこの地をあとにする日がやってきた。何年も何年も同じ水田を使っていると収穫量も低くなり、ムラはどんどん人口がふえて大きくなってきた。そのため狭い台地では動きがとれなくなり、新しい水田可耕地を求めてムラびとたちの移動がおこなわれた。

文　献　桑山竜進氏「大森望翠楼ホテル址弥生式遺跡」（『先史考古学』第一巻第一号・昭和十二年）
米内邦雄氏「大田区熊野神社裏弥生遺跡」（『立正考古』第十七号・昭和三六年）

交　通　望翠楼ホテル跡――国電京浜東北線『大森駅』の南口（山王側）で下車し、駅前の池上通りの坂を蒲田寄りに歩いて三分ほどで右側に大和証券と千代田証券があり、この建物の間を「くらやみ坂」とよぶ道がある。この坂道を少し登ると左手に魚屋と「灯」という喫茶店があり、この間の路を登りつめた台地が、かつて弥生時代の人びとがムラを形成していた。ホテルもここに建っていた。ホテルで開かれた「大森の丘の会」のメンバーは日本画家の小林古径・川端竜子・伊東深水・渡辺文子、油絵の白滝幾之助、水彩画の真野紀太郎、版画の長谷川潔、工芸の藤井達吉、歌人の橋田東声・日夏耿之介・片山広子、のち作家となった勝本清一郎であったと染谷孝哉氏は『大田文学地図』に記している。

熊野神社――大森駅から池上通りを春日橋方面へ歩いて七、八分のところに「大森郵便局」がある。局前の右手の路を奥へ入って行くと「善慶寺」があり、この境内の急な階段を登りつめたところが神社である。なお、寺の墓地には大森義民六人衆の墓があるので、これを見学されたらよい。

（大田区史編さん専門委員）

史誌　第一号　紹介（一九七四・六　大田区史編纂委員会）

古墳時代の大田区――特に史料的にみた背景……西岡秀雄
池上南谷檀林考……新倉善之
大田区の遺跡(1)日本考古学発祥の地、大森貝塚…関　俊彦

ひ　ろ　ば

史料ならびに悲劇的史伝の永遠性・千々和実、先生はエビスさま・亀山慶一、横穴古墳との出会い・菊池義次、左内のかけた橋・田中弥次右衛門、御嶽講について・宮田登、享保飢饉こぼれ話・山本定男
……　その他資料・随想

寄贈

6・24　「史誌」一号完成納入される。

6・30　歴史研究会、年表打合せ。石井家より借用の文書撮影。

7・1　本日より北川家文書のマイクロ撮影開始。

7・3　「大森漁業史」頂戴に富士信用嶋田理事長を訪問（田中専門委員同行）

7・5　第3回専門委員会
分担分野毎の調査計画について審議

7・17　雪谷小秋山先生より電話、仏師運彫（子孫大田区に在住）に関する資料横浜市立図書館発行「郷土よこはま」にあるとの連絡頂く。早速同館より頂戴の手配をする。

7・19　北川家文書を浅間神社に返還する。渡辺主任専門委員と新倉主任専門委員、近世史調査計画等について打合せ。

7・22　大田区関係寺社書上（国会図書館蔵）撮影のため、小高調査委員、橋本主事同館に出張、24日まで。

7・28　拓本作製に関する講習会（歴史研究会）あり。
石川町在住芹沢氏所蔵の縄文土器（破片）拝見のため菊地専門委員来室。同氏は区内発見の板碑も所蔵しておられるとのこと、後日それも拝見させていただくこととする。

7・29

8・11　大森寺において歴史研究会の拓本作成実技講習会あり、編さん室よりも三名参加、今月の取材出張に備える。

8・21　民俗学担当専門委員・調査委員による区内調査実施。今回は多摩川沿いに羽田まで。

8・23　第4回専門委員会。
平川家文書1の発行について審議。

8・26～30　本門寺関係とくに養珠院お万の方に関する資料収集のため静岡・山梨方面に出張（新倉主任専門委員他7名）なお本調査行を側面より援助される目的で歴史研究会メンバーも多数参加。大変御苦労を願う。
出張先　三島市　玉沢　妙法華寺
静岡市　蓮永寺
身延町　本遠寺

8・30　大田区史（資料編）考古Ⅰ納入開始
直ちに大田図書館に預ける。

9・1　人事異動発表、区史編さん室も一名の入替あり。
考古Ⅰ配布のための作業始まる。

9・10　調査対象者に謝礼として贈る手拭納入される。

9・17　東大杉山先生より10・20予定の区内巡りについて案内者及びパンフレットの提供を求められ、民俗担当平野調査委員にお願いすることとし、庁内にてパンフレット類を集める。

9・18　出張調査で収録した拓本整理（文化財専門委員高橋白雲先生指導）

9・24　堀江俊次先生来室、横須賀市立図書館に羽田の漁場争いに関する資料のあることをお教えいただく。

9・26　史誌編集会議（於立正大学）
総ページ数の確定は渡辺先生の原稿待ちとなる。

9・28　第5回専門委員会
史誌第2号の編集、昭和50年度予算編成方針について審議。

9・29　第2回拓本整理。

編集後記

◎予定を大幅に遅らせてようやく第二号の校正を終りました。早く玉稿をお寄せ下さいました諸先生や続者の皆様に、御迷惑をおかけしましたことをお詫びいたします。◎渡辺氏の大論文は、区史にとっては一寸珍しいテーマ。他の市町村史では余り取上げられない分野ですので、史料も掲出して頂きました。◎佐藤氏は歴史教育、宮田氏は区史の視点をめぐって、問題提起をされました。第一号いらいですが随想らんはもっと討論に使われてもよいと、考えています。◎ひろばに集った玉稿も、それぞれ研究余録や経験談として文字通り珠玉の掌篇です。御熟味下さい。◎弱体の編集陣を助ける意味でも原稿や御意見をどうぞ。次号締切りは三月末日です。　田中・関・北原

大田区史　予約募集

◎資料編　平川家文書1　（昭和50年3月末刊行）

新倉善之校訂　B5版　上製箱入 1,000ページ

定　価　4,000円

大田区下丸子、平川家に所蔵された〝都重宝〟
指定の文書のうち、御用触留帳を主体とする支配
、また
は、享
更をは
書31点。
、貢租、
巻を予
—6417
3,800
にお求

史誌　第2号

編集
発行　大田区史編纂室

発行日　昭和49年12月20日

印刷　勝田印刷株式会社